



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

### I-OWA マンスリー・セミナー講演より お金と向き合う 三つのステージで考える逆算の資産準備

講演:野尻 哲史氏、レポーター:川元 由喜子

老後の為に 60 歳でいくら必要かという議論は、常に残高の話です。でも残高の話はやめて、引き出し総額に目を向けてくださいというのが逆算の資産準備の発想です。60 歳というゴール設定をやめ、代わりに 95 歳で資産ゼロ円、というゴールを立てましょうと申し上げています。そこから時間を逆に遡るのです。

まず、あなたはいったいいくら要るのか考えましょう。

(退職前年収) × (生活費レベル%) × (生活年数) で計算します。生活レベルというのは退職前の生活費と比べた比率、生活年数は 60 歳時点からの年数ですが、女性で生存率 20% とすると 95 歳ですから、35 年ほど見ておけばよいでしょう。

これで計算すると、簡単に 1 億を超えます。平均的な数字で計算すると、

$600 \text{ 万円} \times 68\% \times 35 \text{ 年} = 14280 \text{ 万円}$

ここからもらえる年金額

$24 \text{ 万円} \times 12 \text{ か月} \times 30 \text{ 年(受給年数)} = 8640 \text{ 万円}$

を差し引きますと、

$14280 \text{ 万円} - 8640 \text{ 万円} = 5640 \text{ 万円必要}$ 、と計算されます。

ここからが逆算の資産準備です。95 歳から 75 歳時点まで遡ること 20 年、この間はもう運用はしません。持っているお金を使い続けます。毎月の引き出し額は月 14 万円、ずっと引き出していくと、75 歳の時に 3360 万円あれば、95 歳でゼロ円になります





## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

次は60歳まで遡ります。定年退職後、75歳までの15年間は運用を続けます。使いながら運用する時代です。この間の引き出しは残高の4%、運用利回りは3%を狙うとすれば、資産は毎年1%ずつ減っていくこととなります。これですと、60歳の時に3950万あればよいこととなります。60歳以降の引出額総額は5695万円となります。注目してほしいのは、残高ではなくて、引き出し総額の5695万円。先ほど足りないと言っていた金額とほぼイコールです。引き出し総額は残高とは違うということが分かれば、老後5600万必要でも、60歳で4000万ぐらいあればできる。ここで1600万ぐらい下げられるのです。

次に、定年後にも働くということ。60から65歳まで働くとして、残高を減らさない、というルールにしたら、60歳でいくら必要か。この期間(60歳から65歳)の収入が771万円とすれば、3233万円。これでまた700万円ぐらい少なくて済みます。老後働くということは、社会に貢献するといった精神的な意味もありますが、資産に対しても、これだけ違いが出るのです。

もう一つ。先ほど、平均的に68%と計算した生活レベル、これを60%まで下げたらどうなるでしょう。1割ぐらい生活水準を下げるわけです。受け取る年金は変わりませんので、自助努力の分が大体5600万円だったのが、4000万円ぐらいに減ります。4000万の引き出し総額でプランを作ってみますと、75歳以降の年金以外の引き出し額は10万に減ります。75歳まで3%で運用、4%ずつ引き出し、という条件は同じ。すると60歳で2800万円あればいいということになる。

これは意外と大きなインパクトですよね。ただ、単に節約しましょう、と言っても無理。「生活費水準」を下げるのですが、「生活水準」を下げないで済む方法として、地方都市移住というのも選択肢です。個人的には、四国松山などがお勧めですね。

一番初めの数字から、2800万まで下がってきました。こうなると、退職金だけでカバーできる人も出てきます。そういう人は、資金準備しなくていいということになる。「ダメだ」と思うのではなくて、「できる範囲のことがあるな」と思ってほしいのです。

講演ではこの後、退職後の資金運用のひとつとして「定率引き出し」の解説、現役時代の運用アドバイスとしてステップアップ投資、NISAやDC(確定拠出型年金)の展望などについて、その他にも各種アンケート結果などを織り交ぜながら、盛りだくさんの内容をお話いただきました。



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

### I-OWA マンスリー・セミナー対談より 退職後に備える運用、退職後の運用

座談会:野尻 哲史氏、岡本 和久  
レポーター:赤堀 薫里

岡本 | 人生を通じて、資産運用をどういう形でやっていくのかは、局面によって違っていきわけですよね。今日の野尻さんのお話は3%を切り口に、全体を上手く構成されていた大変、参考になる内容だったと思います。皆さんから何か質問があればお受けします。

参加者 | 3%というのは、全金融資産の3%ということでしょうか？例えば3割は手元にキャッシュをおいておかなければならない場合、実際の運用としては7割を3%で回してしまうということになる。これでは駄目だということですね。

野尻 | そうですね。持っているアセット全体を3%で回さなければだめですね。銀行預金もいくらかあって、債券も株もあってというポートフォリオが必要になってきます。

参加者 | 全体が3%で回らなければならなくなると、預金などが多い場合はリスク資産については、5%なり、6%なりで回らないと、全体で3%にならない気がします。



野尻 | 国際分散投資と言えるのは、「国内株、海外株、国内債券、海外債券を1/4ずつ持ちましょう」というのが基本でこれがワークしなければおかしいはず。もちろんそこにREITを保有するというようないろいろな考えがあると思います。でも基本的には、1/4ずつの投資がベンチマークみたいにあって、そこから自分なりのアイデアがあるわけです。

参加者 | そうなると、相当ハードルが高いような気がします。国内外の株・債券で稼ぐとなると、本当にエンジンになって稼いでくれるのは外物ということになってかなりハードルが高い気がします。



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

野尻 | もう少し詰めて言えば、どの年代の人に今の議論するのかということだと思っんですよね。「相当ハードルが高い」と言っても、30代、40代の人であれば、極論を言えば、リスクを無視してリターンを取りに行くべきなのです。リターンを取りに行った結果、リスクがついてきてしまっても、それは時間分散でちゃんとカバーできるはずですよ。その一方で、途中で何か緊急に資金が必要になることがあるかもしれないので、ちゃんと現金もある程度は用意しておかなければならない。これが、60を過ぎた人のポートフォリオとしては、話は違ってきます。やはり、株式を下げて、債券の比率を大きくするなどが必要でしょう。その人のライフステージで運用もかなり変わるということです。

岡本 | 意外に生活費として持つ部分で、キャッシュを多く持っている人がいます。でも振り返ってみて、明日までにどうしても100万円必要だったということは、ほとんどないですよ。どうしても必要だったら、投信を解約しても、株式を売ってもいいわけですから。あまり極端にキャッシュを持ちすぎてしまうと、全体のリターンの足を引っ張ってしまうことになると思います。世界全体の実質GDPの成長は、3~4%位でしょう。日本のインフレは仮に2%位だとしても名目で6%。単純に言えば、大体名目GDPというのは長期金利と同じ水準に収れんすると言われていています。株式のリターンは更にその上にリスクプレミアムが乗ってきます。そうすると、野尻さんの4資産均等分散は、仮に債券の実質リターンが0だとしても、多分3%やそこらは全体でとれるのではないかという気がします。

野尻 | そうですね。

岡本 | 早く始めることが何より大切です。高校を卒業したら、毎月1万円ずつでもグローバルな株式インデックス投信を積立していけばいい。仮に3~4%位で回ったとすれば、30歳の時に200万円位になります。資金を追加せずに私のモデル・ポートフォリオに沿って運用すると、65歳になると500万円位の資産になる。これが退職時の資金に上乗せされてくると大きいですよ。そういう意味では、我々スタート時期を30歳と決めてしまっていますけど、18歳でもいいのかなと思います。

野尻 | ただ、この話をセミナーでお話すると、30歳スタートで言っても、「今更言うなよ。」と言われてしまいます。

岡本 | 高校生ぐらいの若い人にお話しなくては駄目ですよ(笑)。

野尻 | やはり「子どもに言わなければ」というのが大事ですよ。ただ、私もそう思いますが、自分の子どもでも「さあ、今からやりなさい。」と言うのは、なかなか難しいですね。

岡本 | そういう意味では、子どもNISAといのは、一つのきっかけですよ。



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

野尻 | いいきっかけになると思いますが、まだ残念ながら制度的には不十分ですね。

岡本 | 私はよく「65歳でいくら必要？」というよりは、「30歳の時に貯めたお金は、66歳の資金だ」という言い方をします。「31歳のお金は67歳のお金だよ」と。30歳から66歳までは36年間ありますから、もし仮に2%で運用したとしても、倍になっています。3%で運用したとしたら1.4倍になっている。そういう風に考えていくと、例えば30歳の時に収入が100あって、そのうち70を生活費で使い、残り30を将来の66歳の時の為の資金として使うと、仮に2%で運用すれば、それが60になっているわけです。就業時の生活費、70と比べて60が十分かどうかわからないけど、まあそこそこ増えているわけです。65歳の時に貯めたお金は、101歳の時のお金になります。それでいくと65歳で退職するとして、その時点の累計額が実質2800万円以上になりますからね。名目資産額はこの金額に物価上昇分を加えたものになります。そういう言い方をしないと、「30歳の人に65歳までにいくら貯めましょう」と言っても、実感がわからないのです。逆にいえば、40歳で貯めた人は65歳までだと25年間しかない。投資期間36年ではなく26年しかないので、ピーク時の資産額も小さくなってしまう。山に例えれば高さが低いうえ、裾野も短いのです。50歳開始になるともつと山は低く、裾野も短くなってしまう。早く始めることの大切さを教えるのにはこの話し方は有効だと思います。

野尻 | なかなかそこを伝えることは難しいですね。私がこの業界に入って32年ですが、後半半分は個人投資家向けにこういうことをやっています。最初の頃と比べるとここ数年は、セミナーにご夫婦でいらっしゃる方が本当に増えてきました。この後、5年、10年頑張ったら、親子で来てもらえるようになるかもしれない。今後、親子で考える投資の話のテーマができ上がったら面白いと思います。

岡本 | 野尻さんのお話を今日、伺ったのですが、私も全く同じような考えを持っています。つまり、人生を通じての資産運用をどのようにしていくのかというのがテーマになっています。資産形成を始める前の子どもからそれは教えていく必要がある。5歳児位からのお金とのつき合い方、その中に例えば「勉強という投資」の要素も入れることもできる。就職して資産形成をはじめ、退職して資産活用をする。それが最後、死ぬ時まで続いていく。そんな全体の構図が出来てきたら面白いと思います。

野尻 | 本当にそういう人生全体を俯瞰する視野が必要ですね。

岡本 | 資金の引出についてですが、野尻さんがおっしゃっていた、定率か、定額か、という問題では、私も基本的には定率ではないとおかしいと思います。定額で引き出しをしていた場合、リターンがどういう順番で発生するかによって、結果が変わってしまうリスクがある。でも定率にしておけば同じ結果が得られるということがあります。野尻さんのお話だと定率から定額に切り替えるのが、75歳からですよ。70歳を過ぎてくると残高が減ってくる中で、使えるお金が減ってきます。当



## 長期投資仲間通信「インベストラ이프」

然、株価変動があるので、リーマンショックのようにドカーンと下がった翌年は、定率だと生活費が少なくなってしまう。そこで定率引き出しの場合にはフロアをつけたらどうなのかなと思います。

野尻 | 本来であれば、多少荒っぽい言い方をすれば保険がカバーすべきなんですよ。75 歳以降は、保険でキャッシュフローを一定額出せる。もしくはインフレにリンクする形で、実質ベースで一定額出せるというような保険があればいいなと思います。保険業界は、東西問わずハイコストのものが多く業界なので、世界中で保険に対するバッシングが強いのですからね。もっと極論を言えば、公的年金の 65 歳支給は止めて、80 歳支給に切り替え、その代りそこから先は全額生活費を国が持つ。そうすれば、そこまでの資金を用意すればいいということになりますから、長生きリスクが吹っ飛びますよね。これも保険と同じ考え方です。最後の定額引き出しがなくなります。最後まで運用して、残ったら国に全額召し上げられてもいいわけですよ。その代りに自分の生活は全部保険にお願いできる。

岡本 | いろいろと考えさせられることが満載でした。今日はどうもありがとうございました。